

えびすかき「首掛け箱廻し操り人形」の登場時期の研究 — 鎌倉円覚寺門前遺跡出土「山猫のかしら」の事例を基に —

大野 以都美[†]

Research on the time of the appearance of EBISUKAKI “Kubikake hakomawashi ayatsuri (neck-hanging box puppet)” Based on the case of “the head of a wild cat” excavated from the Kamakura Engaku-ji Temple Monzen Ruins

Izumi Ono

はじめに

西宮の「えびすかき」。古くから西宮神社の祭神とするえびす神を世に広めるために、「エビス」の姿を人形に准え、操りながら披露して見せた操り人形戯のことである。

兵庫県西宮市にある西宮戎神社には、「傀儡師古跡—一人形操り発祥の地—」と題された説明文と共に傀儡師像が鎮座している。説明文には、「中世以来西宮のえびすさまに係わる人形まわし一団がこの附近に定住し、傍ら全国津々浦々に人形をあやつりながら戎神の神徳をわかりやすく説いて廻りました。室町時代の末には京都の宮廷にも参入して上覧に供したことが屢々記録に見え、西宮から操りの技を傳えたと言われている淡路や大坂文楽座の人形浄瑠璃は、わが國固有の傳統芸術として尊重され今日に至っているのであります」と示されている。古跡の「傀儡師像」は上半身であり、首から箱を下げ、その箱の中から人形の顔が見えている。このような姿で人形を操りながら歩く操り師のことを人形芸能史の中で、「首掛け箱廻し」と呼ぶ。

このような姿をした絵が寛政十年（1798年）に刊行された『摂津名所図会』に「西宮傀儡師の図」として収録されている。この絵をよく見ると、操る人形はヒトカタではなく、子猫のような動物に見える。そして近年、平成十五年（2003年）、鎌倉円覚寺門前遺跡から、十四世紀前半の後半期のモノだとみられる、動物の頭（かしら）の木偶が出土した。

本稿の目的は、中世期の遺物「山猫のかしら」というモノと、近世期の文献に示された「首掛け箱廻し操り人形」の絵との関係を調べることにある。この「モノ」と「絵」をつなぐことが出来れば「えびすかき」「傀儡子」が、中世期すでに鎌倉の地に登場していたのではないかと考えられるからである。また、近世期の文献に示された傀儡子の

実態が、中世にどこまで遡ることが出来るのかを考えたい。

本稿で問題としている事柄が、絵とモノという二つにあり、そのいずれも年代は勿論、地域も西宮と鎌倉という東西の違いがある。その関係性を調べるため全体を三つの章に分けて考えて行く。第一章では中世の広田社について、第二章では鎌倉という東国に着目している。そして中世の西宮と鎌倉との関係がみえてきたところで、第三章では西宮の操り人形戯の姿（実態）とはどのようなものであったのかを考えていく。本稿は平安時代から鎌倉時代後半、八世紀末から十四世紀後半までを対象としている。本稿では「首掛け箱廻し操り人形」、「山猫のかしら」という名称を用いているが、これは加納克己著『日本操り人形史 形態変遷・操法技術史』（2007年）の中で使われている名称である。

1. 古社大社広田神社撰末社「西宮戎神社」 — 一人形操り発祥の地

1.1 官幣大社広田神社と王朝との関係

中世の西宮神社は広田社の撰末社としての小さな社であった。中世西宮とは、古社であり大社として列格された官幣大社広田神社を指したものである。海路においても、陸路においても、要衝として強大な力を持っていた。山陽道を通れば都へも比較的に近いことから古代、中世の西宮の存在は、王朝から尊ばれた。

広田神社の御祭神としては、伊勢皇大神宮に祀られている天照大神が坐す。八百万の神々の中でもこの上なく尊いとされ、特に荒魂の広田大御神は、勝運の神として崇敬を集めている。中世の広田神社には、国家の神事を司る神祇官の歴代長官や公家、それに文学、和歌、音楽、歌舞芸

[†]2023年度修了（人文学プログラム）

能、漢詩など多岐にわたる賢人たち、五山の僧侶、また叡尊や一遍などが、度々訪れ参詣している。また、武家の源頼朝は、平氏討伐を祈願し、豊臣秀頼は末社、現在の西宮戎神社と共に大規模な改築を行っている。そして、徳川吉宗は現今の地に遷宮している。このように名だたる人々が崇敬を篤く表している。

広田神社と王朝とは、早くから繋がりを持っていたようである。和歌・歌謡の神としても崇敬されて、勅撰和歌集の撰者である藤原俊成や源俊賴が和歌に詠み、後白河法皇撰録『梁塵秘抄』にもまた、広田神社およびその所管社を謡い込んだ今様が多く収録されている。貴族たちは広田神社を崇敬して、歌合を度々行っていたようである。大治二年（1127年）広田社歌合をはじめ、同三年（1128年）広田社頭歌合、同三年九月南宮歌合、長承三年（1134年）広田社「千首和歌」、嘉応三年（1171年）広田神社歌合、同承安二年（1172年）広田神社歌合。そして、同年十月十七日、広田神社歌合は、皇太后宮大夫藤原俊成が判者となり、顯広王、源頼政等も含め当代一流の歌人五十八名が集まって催された。

1.2 神祇官制度—神祇伯家所領

古代の神祇制度では、伊勢神宮以外の全国の主要な神社を管掌して、直接奉幣する有力神社を官幣社、国司が神祇官に代わって奉幣する神社を国幣社としていた。万寿二年（1025年）、花山天皇の皇子清仁親王の子延信王は源姓を賜り神祇伯に就き、その子孫が神祇伯を世襲して白川伯家と呼ばれるようになった。広田社は白川伯家領となっている。伯家の支配した所領は、現在の地理では西宮市がまるごと収まるほどの広大な地域である。

日本の伝統芸能は、「神楽」から始まると言われている。そして、「雅楽」という大陸からもたらされた楽舞がある。神楽歌は、日本神話の中に登場する天岩屋戸の物語を起源としていて、この由来から神事行事に用いられる。最初の神楽歌は、平安宮廷で歌われた神事歌謡であったようである。日本独特の歌舞芸能として今日でも神社で行われている。歌謡は神の来臨から、名残を惜しんで送る明け方までの流れに合わせて、それぞれの役割を持って歌われるという。

建治元年（1275年）八月、思円上人叡尊が広田神社に参詣した。広田本宮において武具を拝見後、南宮社に参り「宝珠」を拝見している。そして講讚の後転読する。この転読の間に舞楽が披露されている。

弘安二年（1287年）十月、時宗の開祖一遍上人智真が西宮社に参詣した。そして、正応二年（1289年）八月、神戸真光寺滞在中に没している。

五山文学の双璧と称される絶海中津、義堂周信については、永徳二年（1382年）絶海中津が西宮を参詣、「宝珠」を拝見している。この時のことは『焦堅稿』に記されている。絶海中津は貞治三年（1364年）、鎌倉建長寺の青山慈永のもとに入っている。義堂周信も西宮を参詣し、「宝珠」

を拝見したことが『空華集』に記されている。義堂周信は貞治元年（1362年）、鎌倉円覚寺の書記に就いている。建長寺と円覚寺にゆかりがあるという点は中世の西宮と鎌倉との接点となる。鎌倉円覚寺門前遺跡から「山猫のかしら」が出土している。西宮の傀儡子が鎌倉の地において、武家屋敷周辺および寺社の門前などを徘徊していたことも、決してあり得ないことではないだろう。

弘長三年（1263年）四月卅日神祇官下文は諸国治安維持を謳う新制として立条された。社内住人検断の第六条に「死門に及ばば八女相加へ、戎御神楽一座を勤仕すべし」と記されている。神楽の演奏など神に仕える少女たちの存在、そして、広田神社の祭神の一つとして戎神があるということは現在の西宮神社に及んでいる。そして、「戎御神楽一座」という存在が確認できる。

1.3 「西宮戎神社」

西宮戎神社は、現在も西宮市社家町に鎮座している。祭神は西宮の主祭神蛭子神、天照大神、大国主大神、須佐の男大神。天養元年（1144年）から治承年間（1177-80年）に成立した「伊呂波字類抄」に広田、夷百太夫の名が見られる。また平安初期、神殿を創設した時に、神体として「剣珠」を奉祀している。

傀儡のはじまりは弥生時代末。能楽や人形浄瑠璃の原形も同じ頃からあったようである。観阿弥、世阿弥親子は「秦」姓を名乗っている。また、古墳時代の501年、中国から手足が動く傀儡子人形が伝わっている。人形を操るという意味からすると、中国の紫姑ト（シコボク）という占いがある。日本ではオシラサマという東北地方のイタコと呼ばれる口寄せがある。「オシラ祭文」を唱えながら人形に見立てた棒を一つずつ持って揺り動かす。先の紫姑トも共通して、語りと人形舞踏という形態である。

天応元年（781年）、散楽戸が廃止された。それ以前は、散楽を含め正規の渡来芸能は国家が管理していたが、散楽戸の廃止後、各芸能は選別されて行き、それぞれの芸能集団へと定着していった。奈良、平安時代の「くぐつ」は、大社寺の法会、祭礼に参勤することを第一とした職能芸能者集団であったようだ。その他にも、地方での大社寺の祭礼や、宿、津における貴人接待も大きな務めであった。

「傀儡」の語が初めて文字として登場するのは、延暦六年（787年）、源高明著『西宮記』巻四裏書である。加納克己氏は、「殿上人所衆等着祓所 余興未盡之時、或為傀儡等」と記されているのが、蔵人や所衆等が傀儡を行ったか、別本には「為」が「召」とあることから傀儡を召したかの意味に取っている。

本田安次氏（1979年）は、「芸能具と断定してよい人形は、おそらく昭和四十九年（1974年）、京洛鳥羽遺跡から発掘された二個の木彫カシラ。場所は鳥羽天皇の離宮跡。（中略）わが人形戯は信仰性を脱却して、人形芝居の段階に入ったとみられるが、その実証遺物と言ってよい」と言われている。そして、この出土遺物は平安時代の人形戯、

しかも人形芝居に結びつく証となるものである。

2. 中世鎌倉と「山猫のかしら」

2.1 鎌倉円覚寺門前遺跡から出土した「山猫のかしら」

平成十五年（2003年）、鎌倉円覚寺門前遺跡から、操り人形の頭（かしら）の部分と見られる、猫の頭らしき木偶が出土した。これまで人形（ヒトカタ）の頭部分が多数出土していることは知られているが、動物の頭は大変珍しいと言われている。木偶の頭だけをいう場合は頭（かしら）、首までを含めた場合でも首（かしら）と呼ぶといわれる。「山猫のかしら」は、頭のみで出土している。『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21（2005年）によると、所収遺跡名は円覚寺門前遺跡、主な時代は鎌倉時代から室町時代に当たる。調査が行われた地点は円覚寺門前遺跡内、山ノ内道とされる県道に面したところである。「山猫のかしら」は、馬道の側溝から出土したという。

「山猫のかしら」は、十四世紀第2四半期のモノであると言われる。調査報告書によれば、この「山猫のかしら」には「下面と上面を除き、丁寧な削りによる調整がなされる。右目にあたる部分は下面まで突き抜けて穿孔されているため、この部分に細い棒を差し込み動かしたものと考えられる。また、顔の上方には貫通しない小孔が1箇所ずつ見られるが、胴部となる「かぶせ」を留めた痕跡の可能性があると記載されている。「山猫のかしら」は、首のところで切られている。調査報告書には山猫のかしらの寸法は記載されていない。図を見る限り「握りこぶし」のような形態である。

加納克己氏（2007年）は、「かしら」の操作棒用の穴が開け直されていることから、長く使用されていたのではないかと推察されている。つまり鎌倉時代末から、遅くても南北朝時代であるのは間違いないところであると言われる。これについて少し疑問に感じた。「山猫のかしら」の構造が制作時期を考える糸口になった。加納氏と同じく、時代は遡るのではないかと思う。しかし、山猫の眼が彫り抜かれた眼形に、玉眼が嵌められていたのではないかという点に重きをおきたい。そうすると、加納氏の言われる鎌倉時代末から南北朝時代よりも遡り、平安時代から鎌倉時代頃と考えられる。木彫仏像の造形の制作が彫眼から玉眼へと変遷するのと時期を同じくしていると考えられるからである。「山猫のかしら」の木偶の実物を見ていないが、図を見る限り確かに大きく抉られている。しかし、抉られただけでは玉眼を固定させることは出来ない。山崎隆之氏（2007年）によると、木彫の眼を形成するには彫眼と玉眼がある。彫眼は、眼形を浅く彫り込み瞳に墨を塗る。また、瞳部分を少し高く彫り、そこに黒曜石、ガラス玉などを瞳材として嵌めたり、被せたりする。九世紀頃の仏像に用いられていた。十二世紀初頭、保安元年（1120年）造立された京都府広隆寺聖徳太子立像から、眼の表現が九世紀のものと同じく変わってきた。これまでにない顔の内側

から穴を貫通させ、半球形の石を嵌め、表面を露出させるものである。「山猫のかしら」の眼の窪みは、小さな突起もなく、また、上下の脛部分を残した形跡もない状態であるので、やはり猫の目を具現化されたそのままを現した眼形であると思われる。

鎌倉円覚寺門前遺跡は、弘安五年（1282年）、無学祖元を開山とし、北条時宗が創建した瑞鹿山円覚聖興禅寺（円覚寺）の境内にある。鎌倉末期に作成された絵図によると、円覚寺総門前の白鷺池の西方前面を、鎌倉から武蔵へと向かう山ノ内道が南北に延びている。その西方の町屋らしき地域を門前町と捉えることが出来る。鎌倉末期の円覚寺境内は、かなり広がっていたようである。先に述べたように「くぐつ」は、鎌倉以前、奈良・平安時代には、大社寺の法会や祭礼に参勤することを第一とした職能芸能者集団であった。当時の社会的背景も含めた地域環境を考えることで、山猫のかしらを携えた首掛け箱廻しの傀儡子の実態を知ることができるのではないか。

鎌倉時代は中世における寺院の発展期ともいえる。鎌倉幕府が開かれ、幕府は東国鎌倉に拠点を置いた。いわゆる武家政権の始まりである。鎌倉と京都の二つの政権が確立したことになった。中世の鎌倉には多くの寺院があり、鶴岡八幡宮、極楽寺、建長寺、そして円覚寺など、禅宗、律宗とともに、鎌倉仏教の新たな展開が見られる。その勢いは活発で衰える様子が無かった。鶴岡八幡宮は鎌倉の宗教的中心として勢いづいて行った。『吾妻鏡』建長五年（1253年）八月十四日条には、「今度始めて西門脇に三郎大明神を勧請したてまつらるるところなり」と記されている。これは、関西系のえびすかき、関東に初めて勧請されたという記録である。中世の鎌倉と西宮（広田神社）との関りがはっきりと残されているということではないか。

2.2 東国の傀儡子の実態

建長元年（1249年）七月二十三日関東下知状（尊経閣所蔵宝菩提院文書）は、駿河国宇津谷郷今宿の傀儡が久遠寺量院の雑掌僧教円を相手に訴訟し、幕府の法廷において勝訴したことを示している。ここから見えることは、中世前期の遊女、傀儡は供御人や神人と同じ立場であり、必ずしも後の時代のように卑賤視の対象ではなかったことである。

同じく訴訟の例として、堀田善衛『定家明月記私抄（全）』（1993年）によると、定家の荘園内であるにもかかわらず、傀儡と家司忠弘の使用人たちが喧嘩をし、定家はその知らせを受けたが、傀儡たちは、翌日には上京して喧嘩の件を、検非違使庁に訴えたという。遊芸人である賤民集団と捉えられてきた者たちが、堂々と検非違使庁へ提訴している。定家の荘園の傀儡たちは、提訴権をも保証されていたという事であろうか。

同じく定家『明月記』天福元年（1233年）八月二日の条に奈良に出た猫股のことが記録されている。また、鴨長明『四季物語』や、卜部兼好『徒然草』第八十九段「奥山に猫股というものありて、人を食ふなる」（以下省略）など

えびすかき「首掛け箱廻し操り人形」の登場時期の研究
 一 鎌倉円覚寺門前遺跡出土「山猫のかしら」の事例を基に

の記述もあり、中世から時代が下って江戸時代、「首掛け箱廻し操り人形」が関東方面では「山猫廻し」と呼ばれて来ている所以の一つではないか。大江匡房の『傀儡記』に、「平安末、東海道の各地にあつて、旅人に媚びを売って活躍していた」などと美濃赤坂の傀儡が挙げられている。享保十五年（1730年）に刊行された『絵本御伽品鏡』に傀儡師が山猫を出している絵があり、「傀儡子どのやうなあやつりじゃやら 古ハ 東乃 野上 今 西宮」と記されている。中世期にはすでに有名であったこと、摂津西宮の「えびすかき」と同じ様に捉えられているように思わせる詞章も示されている。現在の岐阜県大垣市の青墓の野上、「美濃青墓宿」の傀儡子のことを現わしている。しかし、この絵の動物の操り人形は、山猫ではなく「貉」であると加納氏は述べている（鎌倉教育委員会2005年）。

3. 中世以前の西宮の傀儡戯

西宮の傀儡戯の歴史では、平安時代末期に西宮に傀儡子が現れたと云われていて、「傀儡子」、「木偶まわし」などと呼ばれていた。彼らは諸国を廻りながら興行していたと云われている。古代中国に起源を持ち、日本、朝鮮、ベトナムといった王朝国家に伝えられた音楽「雅楽」がある。律令官制においては外来の歌舞音楽の演奏・演舞、そして後継者育成のための教育をつかさどる目的で、「雅楽寮」という治部省に管轄された役所があったが、天応元年(781年)、散楽戸は廃止された。しかし、廃止されたとはいえ、まったく無くなったわけではなかったようである。九世紀の半ば、約五十年間に楽制改革が行われて行き、それまでの大陸からの外来楽舞は整理されて行った。これを受けて、それまでの優れた芸能に、日本の風土や日本独特の社会環境が、美意識を深め、日本独自の芸能へと生まれ変わったのではないか。この楽制改革が遂行されている間は、下級官人（衛府）たちが、奏楽を求められる目的に合わせて務めていたようである。しかし、それも貴族たちの楽しみに応えることが出来なくなり、雅楽がしだいに鑑賞芸能として、注目を集めるようになっていったようである。十世紀にはいと、御遊といわれる鑑賞のために行われるようになっていき、その後、『延喜式』でもみられる儀式、祭式への出仕に限られて行った。十世紀半ば頃には、楽所が準公的な機関として演奏活動を行っていた。国が「雅楽」音楽や諸芸能を保護していた。一方、傀儡戯が渡来芸能（散楽）の中に属していたかもしれないが、外来楽舞であったことは不確かである。

天徳四年（960年）三月三十日、村上天皇主催で「天徳歌合」が内裏で行われている。この歌合せについては公的な行事として、その運営、準備、進行を知ることが出来るとして、後の「歌合」の規範となったとされている。そして、この歌合せの中に、「傀儡」の文字が残されている『西宮記』の撰者左大臣源高明の名が（判者として）記されているのである。「天徳歌合」の場で、傀儡戯がどのよ

うに披露されたかは記録にない。ここでは、歌合せがどのように執り行われたか、そして、もし宮中で傀儡戯が披露されるとしたら、どのようなタイミングなのかを考えてみる。

歌合が執り行われたのは、内裏清涼殿、天皇が日常を過ごす場所である。主催者は天皇自身である。この歌合に参加することができる競技者は、公卿、殿上人に限られた。そして何より注目するのは、和歌のみではなく、その場の装飾にもある。衣装や調度の品、工芸品、薫物、音楽、舞人の舞、参加者の容姿や所作など、これらは歌合という行事の大切な構成要素である。王朝文化の贅を尽くした、美意識を集中させたというべきものであった。渡部泰明氏（1198年）によると、歌合は午後三時過ぎに始まって、歌を発表しては歌舞管弦を楽しみ、そして酒を酌み交わしながら、一晩かけてゆっくりと進むようであり、翌日の明け方まで続いたという。これが、王朝の雅な遊宴というものであろうか。このなかで傀儡戯が披露されるとしたら、選ばれる傀儡子たちとはどのような者たちだったのか。

中世期、西宮の傀儡がなぜ高貴な人々に受け入れられたのかを考えると、時代は下っても雲上に仕える者、雲上に入力できる者たちの技能もさることながら、その所作、立ち振る舞いが身についた者たちに、確りと根差したものがあつたのではないか。禁裏、雲上に呼ばれるのに相応しい「傀儡戯」であるということは、もちろん、その傀儡子の所作、身なり、品格は絶対問われたはずである。こうしたことは、人形にも当てはめられる。目を見張らばかりの人形戯であるなら、人形の衣装にも拘らなければならないだろうし、人形本体にも常時操作しやすくするための、維持管理が必要であったはずである。そして、人形を操る技術を維持するための修練は必要不可欠である。これだけのことが、技術の修練だけで身に付くとは考えにくい。

「散楽戸の廃止」を経て、それまでの芸能が選別され、技術の修練は怠ることはなく、やがて民間に流れて行き、それぞれの芸能集団へと落ちていき、やがて定着していったのではないか。古代、中世前期の傀儡の存在は、大社寺の法会、祭礼に参勤する事を第一とした職能芸能者集団であった。なかでも「傀儡」の場合は地方大社寺の祭礼への勤仕以外に、宿や津における貴人接待も大きな務めであった。

散楽戸の廃止が傀儡戯の大きな分岐点となつたのではないか。西宮戎神社には、「傀儡師古跡一人形操り発祥の地」と記された傀儡師像が鎮座している。そして平安末期、この産所町に傀儡子が現れたと云われている。彼らは、傀儡子、木偶廻しなどと呼ばれ、祖国を廻りながら興行をしていた。

おわりに

これまで、西宮の「えびすかき」「傀儡子」についての研究は、中世後期から近世期にかけての、「えびすかき」

の最盛期を迎えるころから、衰微に至るまでを捉えたものが多かった。しかし、平成十五年（2003年）、鎌倉円覚寺門前遺跡から「山猫のかしら」という操り人形の頭の木偶が出土した。しかも、十四世紀前半の後半期のモノだという。この情報を得た時、傀儡子の歴史が大きく遡るのではないかと期待した。現在、西宮の「えびすかき」についての興味深い資料として、寛政十年(1798年)に刊行された『摂津名所図会』に「西宮の傀儡師の図」が収録されている。この資料は、江戸時代の西宮の町を徘徊する傀儡子の姿をあらわす絵である。この絵をよく見ると、箱の中から動物の顔が覗き、目を下げれば尻尾も出ている。つい先入観から操り人形と聞くと、まず「ヒトカタ」が最初に思いつくため、この絵を疑う事もなくずっと「ヒトカタ」だと思いついてきた。このヒトカタでない動物の「かしら」によく似たモノが、鎌倉から出土した「山猫のかしら」である。そして一つの絵であるが、「西宮傀儡師の図」と結びついているのではないかと、中世期の遺物「モノ」と、近世期の文献に示された「絵」が揃ったことで、これまでよりも、中世期にまで目を向けることができたのである。それは、「えびすかき」「傀儡子」が、中世期すでに鎌倉の地に登場していたのではないかとということ、そして当時の傀儡子の実態を知ることで、それ以上にどこまで遡ることが出来るのかを考えることが出来た。

第一章。中世の西宮とは、官幣大社広田神社のことであった。西宮戎神社はその広田社の社域にあって、摂末社として存在していた。広田神社と王朝との関係は早くから繋がりをもっていた。中でも「歌合」においては、とくに平安時代の終わりまで、歴史的事実として明白に確認されている。万寿二年（1025年）、花山天皇の孫延信王は源姓を賜り神祇伯に就いた。広田社は白川家領となる。広田神社は公家政権下におかれた。

第二章。まず一つ目として、鎌倉円覚寺門前遺跡から、操り人形の頭（かしら）の部分と見られる動物の猫の頭らしき木偶が出土した。「山猫のかしら」は十四世紀前半の後半期の出土ということであるが、それ以前の制作なのではないか、木彫仏像の制作が九世紀頃から始まっているということからして、平安時代から鎌倉時代に作られていてもおかしくはないと考えられる。そして二つ目であるが、東国の傀儡子たちの実態について、中世前期の遊女、傀儡は供御人や神人と同じ立場であり、必ずしも後の時代のように卑賤視の対象ではなかった。西国ではあまり取り上げられない出来事を知ることが出来た。中世の西宮（広田神社）と鎌倉とは、関係があるということがはっきりしたと言える。故に、西宮の「えびすかき」が、中世鎌倉の門前町や、武家屋敷、社寺周辺を徘徊していたことは十分あり得るといえるのである。

第三章。西宮の傀儡子たちは、平安時代末期に現れたと云われている。日本の伝統芸能には「神楽」と、「雅楽」という大陸からもたらされた楽舞があり、歌舞や外来の歌舞音楽の演奏、演舞、そして後継者育成のための教育をつ

かさどる目的の「雅楽寮」という役所があった。日本の音楽や歌舞は、国によって保護されていた。しかし、天応元年（781年）、散楽戸が廃止された。この散楽戸の廃止が、傀儡の大きな分岐点となったのではないかと考える。それまでの外来系の楽舞が整理されていく間、本来、軍事を掌る衛府の官人たちが務めていたが、その者たちこそが、人形を操る技能をもつ者たちである。その後、傀儡戯の技能の継承にどのように携わっていったのかは分からない。が、少なくとも朝廷に大きく関わりをもつ者たちであったと思われる。

謝辞

修士論文を無事に書き終えられたことは、ひとえに近藤成一先生、杉森哲也先生の、丁寧で的確なご指導、また貴重なご意見を戴けたからこそと感謝しております。そしてゼミの皆さまへ、貴重な体験ができましたことにお礼申し上げます。

文献

- 網野善彦・石井進編『中世都市と商人職人－考古学と中世史研究2』名著出版、1992年
- 網野善彦『網野善彦著作集 第七巻「中世の非農民と天皇」』岩波書店、1984年
- 網野善彦『網野善彦著作集 第八巻「中世の民衆像」』岩波書店、2009年
- 網野善彦『網野善彦著作集 第十五巻「列島社会の多様性」』岩波書店、2007年
- 伊藤毅「「宿」の二類型」五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民—中世から近世へ—』（山川出版社、1993年）所収
- 岩城卓二「西摂津社会の中の西宮・広田神社」（『ヒストリア』236号：特集近世の西宮神社と戎信仰）、2013年
- 奥村孝雄『旧官幣大社 廣田神社史を中心として 西宮郷土誌』広田神社、1981年
- 奥井遼『〈わご〉を生きる身体—人形造いと稽古の臨床教育学—』ミネルヴァ書房、2015年
- 笠松宏至・佐藤進一・百瀬今朝雄校注『中世政治社会思想 下 日本思想体系二二』岩波書店、1981年
- 加納克己『日本操り人形史 形態変遷・操法技術史』八木書店、2007年
- 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21平成16年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会、2005年
- 喜田貞吉「夷三郎考」（『民族と歴史』第三巻第一號：福神研究號）、1920年
- 北見俊夫編『恵比須信仰』雄山閣出版、1991年
- 小寺融吉「人形と人形つかひ」（『民俗芸術』二巻四号、民俗芸術の会編、地平書房、1925年）

えびすかき「首掛け箱廻し操り人形」の登場時期の研究
 — 鎌倉円覚寺門前遺跡出土「山猫のかしら」の事例を基に —

- 斎藤良輔『日本人形玩具辞典』東京堂出版, 1997年
 鈴鹿千代乃『西宮神社と淡路島』(吉井良隆編『えびす信仰事典』, 戎光祥出版, 1999年)
 諏訪春雄『アジアの人形 日本の人形芸』勉誠出版, 1999年
 世界人権問題研究センター編『散所・声聞師・舞々の研究』思文閣出版, 2004年
 田岡香逸『廣田神社創祀考』(『日本上古史研究』第五卷第十二號一式内社の研究二, 1961年)
 滝川政次郎『傀儡戯・傀儡子族と百太夫信仰』(『神道史研究』22巻, 5・6号, (西宮神社特輯号)1974年)
 竹内勝太郎『藝術民俗學研究』立命館出版部, 1934年
 角田一郎『百太夫と百神』『兵庫史学』26号, 1961年
 角田一郎『人形劇の成立に関する研究』旭屋書店, 1963年
 角田一郎『人形芝居の歴史一人形まわしから文案まで一』『月刊文化財』第一法規出版, 1963年
 角田一郎『日本の傀儡子』(傀儡(特集)), 日本美術工芸, 1968年
 鳥越文蔵『歌舞伎・文楽』第1巻(歌舞伎と文楽の本質), 岩波書店, 1997年
 鳥越文蔵『歌舞伎・文楽』第7巻(浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃), 岩波書店, 1998年
 丹生谷哲一『検非違使—中世のけがれと権力』平凡社, 1986年
 西宮神社文化研究所編『西宮神社御社用日記 第一巻』清文堂, 2023年
 西宮神社文化研究所編『西宮神社御社用日記 第二巻』清文堂, 2023年
 西宮神社文化研究所編『西宮神社御社用日記 第三巻』清文堂, 2023年
 西宮神社文化研究所編『西宮神社御社用日記 第四巻』清文堂, 2023年
 西宮神社編『西宮神社』学生社, 2003年
 西宮市教育委員会編『西宮の歴史』西宮市教育委員会, 1989年
 西宮市郷土資料館編『西宮市立郷土資料館紀要・西宮の歴史と文化』西宮市立郷土資料館, 1985年
 能勢朝次『能楽源流考』岩波書店, 1938年
 萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂 第一巻』同朋舎出版, 1995年
 塙保己一『群書類従』第一二輯: 和歌部, 続群書類従完成会, 1932年
 林屋辰三郎『古代國家の解體』東京大学出版会, 1955年
 林屋辰三郎『中世藝能史の研究 古代からの継承と創造』岩波書店, 1960年
 武家の古都・鎌倉世界遺産登録推進三館連携特別展企画委員会, 神奈川県立歴史博物館編集『武家の古都・鎌倉』(世界遺産登録推進三館連携特別展図録), 2012年
 細川涼一『中世の身分制と非人』(木村茂光・井原今朝男編『展望日本歴史8: 莊園公領制』東京堂出版, 2000年), 初出1983年
 堀田善衛『定家明月記私抄(全)』新潮社, 1993年
 本田安次『芸能』(日本の民俗八) 有精堂, 1979年
 源高明: 土田直鎮・所功『神道大系 朝議祭祀編二 西宮記』神道体系編纂会, 1993年
 宮瀧交二『中世「鎌倉街道」の村と職人』(網野善彦・石井進編『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』(中世の風景を読む—2) 新人物往来社, 1994年)
 村上紀夫『近世勸進の研究—京都の民間宗教者—』法蔵館, 2011年
 村上紀夫『まちかどの芸能史』解放出版, 2013年
 森末義彰『中世の社寺と藝術』畝傍書房, 1941年
 山路興造『翁の座 芸能民たちの中世』平凡社, 1990年
 山路興造『操り浄瑠璃以前』『芸能史研究』132号, 1996年
 山路興造『近世芸能の胎動』八木書店, 2010年
 山崎隆之『仏像の秘密を読む』東方出版, 2007年
 吉井貞俊『福の神 えびすさんものがたり』戎光祥出版, 2003年
 吉井敏幸『散所村から人形操村へ—淡路三条村と西宮産所村—』『天理大学人権問題研究紀要』第9号, 2006年
 吉井良尚『西宮神社史話』西宮神社, 1961年
 吉井良秀『西宮夷神研究』吉井良秀(私家版), 1935年
 吉井良秀『夷信仰と傀儡師』(『西宮神社の歴史』西宮神社社務所, 1961年)
 吉井良隆『神社史論攷』西宮神社, 1990年
 吉井良隆『えびす信仰と西宮神社』(吉井良隆編『えびす信仰事典』戎光祥出版, 1999年)
 吉井良隆『人形操りと百太夫信仰』(吉井良隆編『えびす信仰事典』戎光祥出版, 1999年)
 吉井良隆『廣田神社御鎮座壱千八百記念 廣田・西宮両宮史の研究史料編』吉井良隆発行, 2001年
 脇田晴子『女性芸能の源流: 傀儡子・曲舞・白拍子』角川書店, 2001年
 脇田晴子『日本中世被差別民の研究』岩波書店, 2002年
 渡部泰明『和歌とは何か』岩波新書, 1198年
 『西宮歴史年表』西宮市立総合教育センター, 1987年